



総合体育館に設置されている伊賀さんのメモリアルコーナー。貴重な品が数多く展示されていますので、ぜひご覧ください。

スケートを教えていた富田玲子先生に呼び止められて「随分スケートが上手だけれど、どこの高校生？」と聞かれました。私は「高校には行っていません。仕事をして実家に住んでおられます。スケートには行っていません」と言いました。「高校には行っていません。仕事をして実家に住んでおられます。スケートには行っていません」と言いました。「高校には行っていません。仕事をして実家に住んでおられます。スケートには行っていません」と言いました。

すぐに返事が返ってきて「やっと勉強する気になったか」と書いてありました(笑)。自分は「スケートでチャレンジしてみたい」と説明すると、吉田先生が「分かった。手続きは全部やってあげるから挑戦してみなさい」と言ってくれました。それで翌年、京橋商業高等学校という定時制高校に入学しました。



——仕事が終わってから学校へ通い、さらにスケートの練習もして、大変だったと思うのですが。
伊賀・大変でした。朝2時半に起きて仕事をして、17時から21時までは学校、その後23時までスケートの練習をして、40分くらいかけて家へ帰るとい生活をしていました。麻布高等学校という進学校の生徒たちと帰りのバスが一緒になるのですが、その生徒たちが「将来は弁護士になる」「俺は裁判官になる」といった話をしているのが聞こえてくるんです。私は築地で仕事をしていましたから、社会的な部分では勝てないなと思うわけです。でもスケートでは負けないぞと、そういう信念のもとで頑張っていました。

——体力もすごいのですが、精神面も強かったのですか。
伊賀・若かったんで体力はありましたが、体重はどんどん減っていき、45kgくらいまで痩せました。私がいまにも痩せていくので、数学の遠

藤先生が「どんな生活をしているんだ」と聞いてきました。それで一日の流れを説明すると、遠藤先生が涙を流しながら「何とかしていい仕事を探してやる」と言って、後日、健康器具の会社を紹介してくれました。その出社時間は8時でしたので、一気に楽になりました。

——それでも大変ですよ。

伊賀・ええ。それで、遠藤先生がまた別の職場を紹介してくれました。そこが京橋書店という本屋さんでした。そこは出社時間が9時半でしたので楽ですよ。体力もついてくるし、勉強もできる、スケートもできると、一つ一つが充実してできるようになりました。そこからどうやって絵の仕事に転身したかということですが、京橋書店では本のセールスの仕事をしていました。いろいろな企業に営業に行くわけです。熱心に通ううちに、一冊2万円とか5万円する「全集」を買ってもらえるようになりしました。「孔雀画廊」という画廊にも美術全集を売りに営業に行きました。何回も行くんです。そうすると画廊の小関文吾社長が「随分頑張り屋だな、うちで働かないか」と言うのです。今でいうヘッドハンティングですね。私が18歳のころの話です。